通俗

渡邊義方編輯

日本小史

第七編

上

A557-13

染崎延房撰閲
渡邊文京操觚

梅堂國政畫

通俗日本小史

東京書肆　金松堂發兌

本傳數種の件なる中に最もかしこと事なるべく唯南朝の衰運なる巻を繙き閲する毎に血涙膝に落るを覚えぬ此時に方りてや嗚呼忠臣と後の世まで称へらるる楠公なり藤房卿の賢明あり其他新田名和甲乙と良将名士許多なりて笠置の山と出給へるようなりつつく苦中の苦を吃し政権王室に回復したるも尊氏の奸謀に陷り権を足利に握られしる此書に依て當時を想へば誰か遺憾に堪ざる者なるべん是を北條の奸に比まれば最も尊氏と甚だしと言べし然して北條が執権たること九代にして百五十四年足利が征夷大将軍たること十五世にして二百三十八年の俱に長きを保てる事実に天道に非ざるを是なるかと古人の歎息宜なる哉と此書を検閲するの序朱筆を以て贅言を加ふ

明治十五年第一月

春水老人誌

48-8444

天莫空勾踐

櫻樹と白りて高徳二句の詩を題を

義貞佩刀を
波中ゟ
投じて
海神ゟ
供ゑ

上之巻

正成赤坂の城より出りて種々の奇計を設け十万余る賊軍を屢々悩ます起り備後三郎が櫻樹より二句の詩を題し聖慮を慰め奉る芋より大塔宮の高野山より躱れ山徒と事を計らるゝ終る

下之巻

義貞が護良親王の令旨を請ふて領國より義兵を挙るより起り直義鎌倉より大塔宮を弑虚し尋て尊氏関東管領と自称し稍反状を露はす終る

通俗日本小史七編巻の上

東京　渠崎延房撿閲

渡邉文京操觚

却ッて説く曩に笠置の援兵として高時が令を傳へ関東諸州より募集せし強兵十余万騎急ぎ西上なんとする近江まで来る折しも笠置既に陥りて敵軍敗走すと聞めるうち楠正成義兵を挙げ赤坂の城に在りと聞き卒さらで勝に乗り彼と一挙に亡ぼさんと直に進路を東に轉じ赤坂城

へと押寄たり此時よ當て赤坂の築城纔こゝよ
その功を遂しのゝ兵僅ゝよ五百人賊の大軍よ比
ぶれた現よ九牛の一毛ざもなゝぬを勝誇りたる
驕將怠卒多勢を持こゝ彼我とゝゝねを俱よ笑ひ
ゝ言へるやうかゝる小城を破らんゝと猶枯木を折
るがおとし何ぞ大兵を要せんやと侮ゝり思ふ無
謀の暴雄揉潰さんと前後を爭そひ競ふて城よ攻
上りいゝも劇しく逼り擊つ智ゝう勇ゝう仁慈お
る三德兼備の名將正成いうゝう容易く破らゝゝき弟

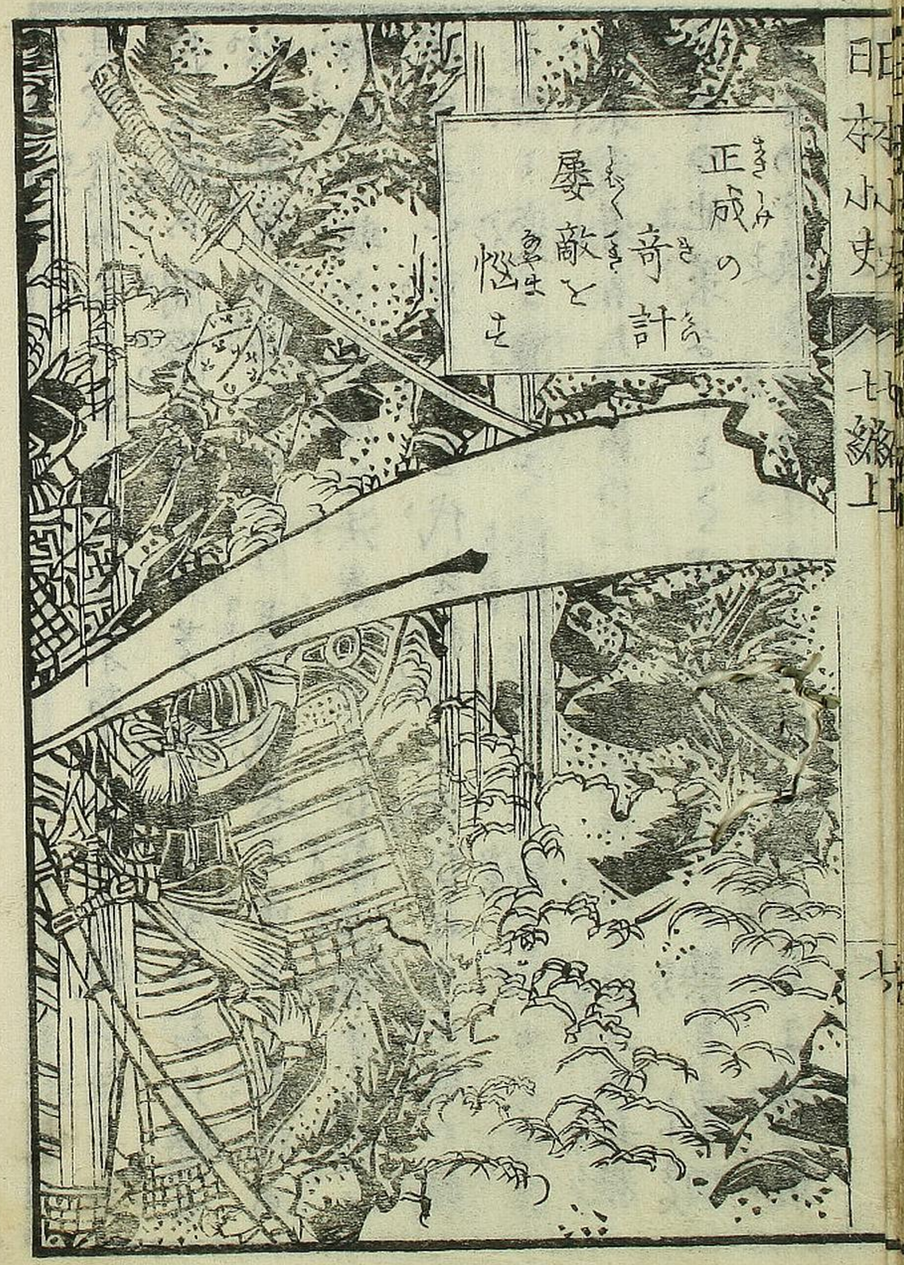
七郎正季及びその族和田五郎止遠とゝて三百騎よ
將たゝしゝ城を距ゝ六七丁彼方よ茂き林の中
よ密ゝよ埋伏ゝさゝしゝ而ゝゝ親ゝゝ城を守ゝ
彼方よ當ゝ此方を防ぎ宛ゝゝ四股を使ふが如く
自由よ士卒を指揮ゝゝて射出ゝゝ弓勢いゝと鋭ゝく
一ッも空矢なゝざれば忽よ中りて殪ゝ者幾百
人の數をゝゝぞ思ふゝ增ゝたる強勢よ東軍いゝ
く鬼胎とゝゝ初めの猛勢よ似ずやゝゝぞ兵を收め
て引退ぞゝ暫ゝ憩ふて在ゝ一発の狼烟雲と

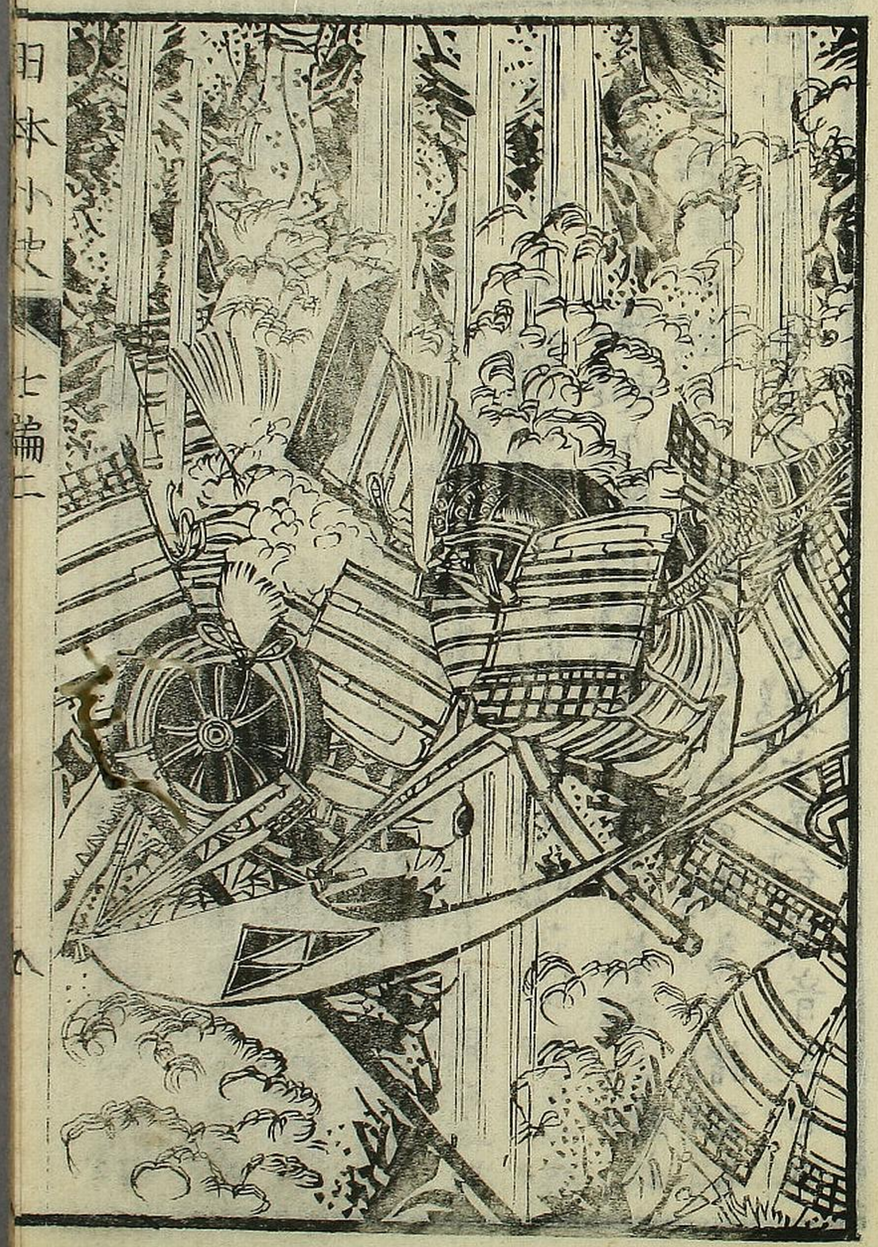
撥き東然響くや忽ちまち壕より應ずる二手の伏兵左右の茂林の中ようりして一時に動と鯨声を揚げ正季正遠前後より賊を中に夾きこ逃しへせと攻立らるを是いそも什麼ぞと驚く賊軍周章狼狽き蹂乱ぶそを時機ハようと正成ハ二百余騎を囲形に備へ城門颯とおし開き逃んと歩めく賊軍が道波遶ぎり三面より齊しく合撃るせーうべ間ゆる術もなうをあそ度を失ふく右往左往撃るなり逃るなり干戈器械をうち捨て皆散こに敗走し漸

やく石河々原に到りて敗兵を收め吻と一下呼吸吐く間もなうせぞ追撃ぎそうと思ひの外軍慮微妙き正成を迅速く兵を引まとめ賊の捨たる鎧仗を分捕ふして凱歌ゆげ徐々城に入りーうど勝を曹の緒を締ろう防禦に油断をうけるを去わどに賊軍ハ初度の合戦うち負てその強膽を拉しがを大いに英気を挫きしものこうの衆を恃こそ懲ぞまうに昨日の恥を雪めんと翌日十月廿一日未明を抱しく来り攻む此時城中矢石を発せぞ寂寞と

しく人たるに如く更に應ぜず形狀みられを又如何
なる奇計ならんもはれぞと暫しが間躊躇しが暴
虎の驍賊堪へ得ぎ何わとう事あるべきぞ進めや
進めと罵り合ひ城の壁へ攀登り跨り踰て入らん
とにて正成二重の壁を設け組とりてあまを維ぎ賊
軍斉一く蟻附もう紙見くかの維ぎたる懸組と一
時に弗と断放てば壁い忽ち覆へり衆兵磴と倒
るく頭上へ釣わたる大木大石瓦乱々々磴と落ち
さあり壓されて死まる者千余人翌日東軍もまた攻

具弦修め各自革の楯を裳もう手みく鐵の熊手を
持ち城の間際に攻め寄せく熊手を壁に掛た懸つ
以て壁牆を破らんとて正成城兵に命下て長柄の
杈杓と執り沸湯を沃ぎかけしむ敵焦爛して退く
賊軍手を更へ術を代へ種々に攻むれど正成い機
に臨み変に應じく能拒ぎ戦ふが故さしもに強き
坂東武者もたぐおの一小城攻め倦み此上へ兵粮
攻めの他策なしとく城の周囲に塹を築き遠田
なものく敢く攻まず居るまに城中爰に糧盡


正成の奇計
屢敵を惱ます



く士卒大いに困苦殆極む是に於て正成衆に向ひ去へるやう吾天下に先だち大事を挙げ国家の犠牲に呈げし身なれば死さるい豫ての覚期なれど今天子賊手に幽閉せらるる国歩困難順逆更殺異りを苟くも報国の志気ある者空しく死せざるの時に於ては吾今伴りて死せば敵則ち夫れ然らを則ち復起り神出鬼没彼をして奔命に疲れしむ是軀を全うして敵を亡ぶるの術なり諸君如何に思ひたまへと問へば衆士異句同音にその

議尤も然る為し早々計らひたまへといへり正成則ち城中に深さ二丈余の穴を穿ち戦死せし士卒の屍をその中に投入れその他の焼草を積めかさね恰も好しその夜の大雨に紛れ或ひは十人或ひは三四人士卒と倶に逃れ出づそが中に勝田直幸和田宗景田原正忠恩地為祐の四人を留めおきて令して曰く我落ちく稍遠き頃火を放ちて疾く去れよと正成潛に城を出で行くあと二十餘丁直幸等四人火を放ちて去る賊軍城中の火の起るを見て備へ

正成勢ひ尽きて落去ると覚えたり逃せる遣るみと總軍一度に鼓譟して城に入るに敵隻騎もならざるのみ穴の中に焼残りし骸骨数多あり我見て正成自燼せしと思ひ湯浅定佛就て赤坂城を守らしめ兵を引て東に去る賊の帝を捕ふるや平等院に入れ奉りまゐ六波羅に移しまゐらせ後伏見帝の皇子量仁を立て位に即しむ是北朝の光厳帝なり二年二月高時遂に帝を隠岐に移せ参議藤原忠顕官女藤原氏の供

奉るのみ而して賊将佐々木高氏等兵三千を以て護送して道を山陽道に取りて備前を過る本国の人児島高徳嶮に據て帝を奪はんと謀りしを事成ずして已に高徳は備後守範長の子なり世々備前の児島に居り備後三郎と称せ曩に帝の笠置に在るや父範長と倶に義に赴かんと其準備をなすに笠置陷り楠氏赤坂に敗れしと聞きたちまち赴むくもその甲斐なしと只徒らに止まるのみ帝西遷して途に聞くも慷慨悲

憤自〻禁ぜず奮然として衆に謂ッて曰く吾聞く志士仁人身を殺して以て仁を為さゞり義を見て為ざるハ勇なきなりと身を殺して仁を為さゞるの時に在り宜しく西遷の要路を遮ぎり駕を奪ふて大義を挙ぐべしと勇む詞に衆士ハ奮ッて其議に従ふ人ぞ高徳乃ち衆と率ゐて舟坂山の嶮路を要し今や遅しと待ち久しく斥候を出して様子を探しめ賊徒も護送の用心厳しく急に道を轉じて山陰道に向ふと聞き彼が行向を遮らんと間道を馳せ杉坂に至れば車駕既に過去りぬと追跡の便りを失ひ空しくて帰る所詮覚束なしと衆士霧散して去る高徳悵恨に堪ずして今一時速やかに成んことを責てハ余所なれども龍体を守護し行ひんと心決し容を更え服を變じて護送の雑兵等にまぎれ混り車駕に尾して行くこと数日一度帝に見え奉りつゝいとゞ志気を昂めせ叡慮を慰さめやと思ひしかど護衛おさく厳重にして絶てその間を

きそのうち夜より紛れて漸やく帝の御舘より忍び
入り庭の内外を徘徊せしのち見ゆるあたりのうち
ざれを屹と心より思案みし櫻樹の幹を白りて墨斗
の筆を拔出し「天莫空勾錢。時非無范蠡」と二句
の詩を題して去る翌朝護衛の兵士等聚まり視れ
ども讀むなきなれば帝熟く視たまひて世より勤王
の士あり知り心密より欣然たり帝隱岐より至りて
國府島に居りたまへ高時帝を奪ひ奉り恐れ
遥に州の守護佐々木清高をして兵を率ゐて監護

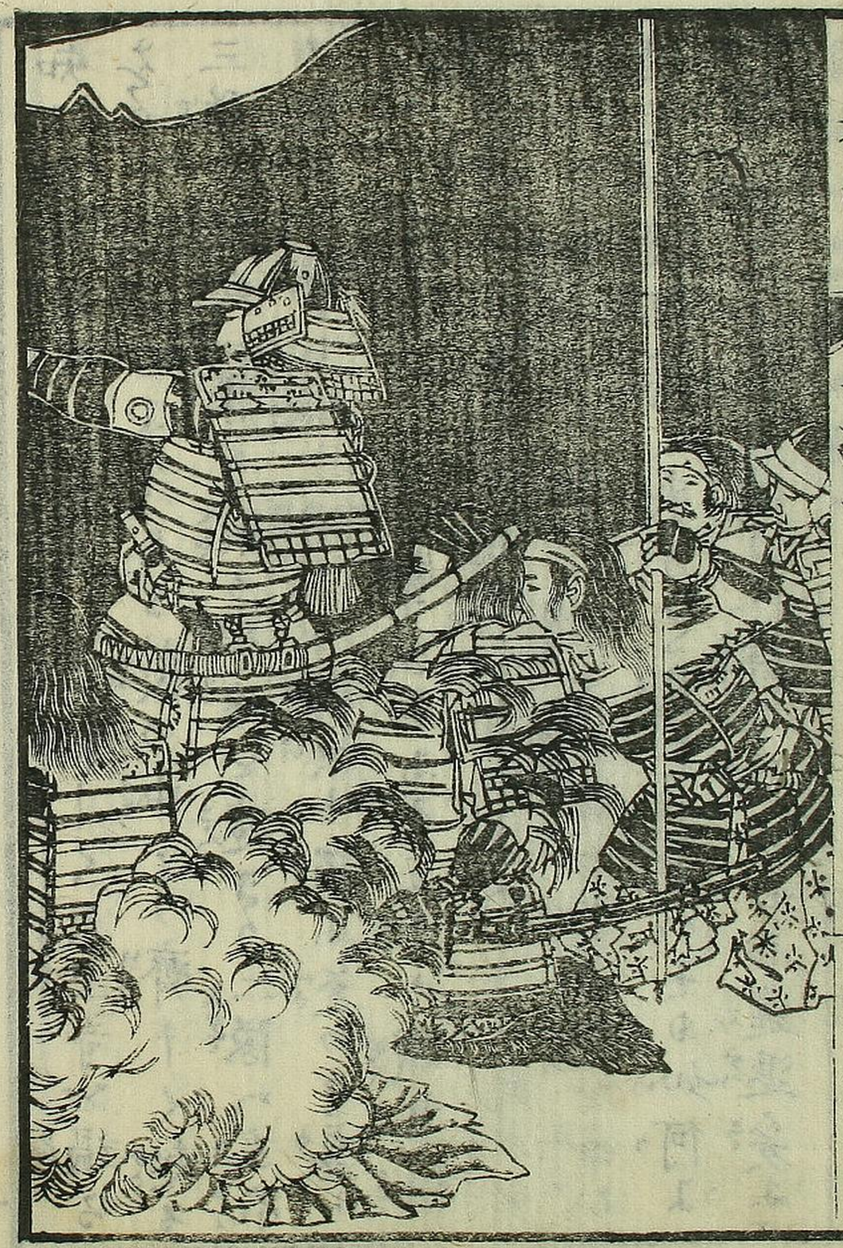
せしめ藤房以下公卿六人を流し處し尚飽足らず
や尊良宗良恒良の三皇子を呼び流し恒性皇子
弑逆せり特り第三の皇子護良親王のみ危うく
虎口を逃れて吉野の奥へと落たまひを諸道の
官軍潰散して四方に勤王の師あり」四月正成
金剛山を出で五百騎を以て赤坂城を攻む城將湯
浅定佛兵粮を紀伊より徵せと正成迅くも探知して
そが運輸の道を遮ぎり忽ちまち之を奪ひ取り甲
冑兵仗と苞に入れ米の如くみ荷づくろひ窟強の

精兵三百人をしてまた紙擔いしめ別に兵と分ち
て追ふがおとたの況をまして城兵を欺むく斯
る奇計のかうたしてとい神ならぬ身のいうでう知
るべき是を正しく敵兵が躬方の糧食を奪ハん
とて偖ととそ追ふと覚えしう疾くく彼を引入れよ
敵ハ糧食を奪ハるとも鈍くも罠ハかけられて左
右ハく城門おし開き思ひのまゝに納るゝあぞ仕済
したうと三百人苞に納ハたる甲と取り手ごゝろく
著下し獲物をとうち振うり吶喊んで起り鬪ひ奮擊

突戰せざるもなく今ハ始めぬ正成が神変不測の
計策に度を失ひて城兵を擊う者数を知ら
ぎ城將湯浅定佛為を所をあらぎ遂に降参しく
ぎしうた正成乃ちその降兵を併せて七百騎進
んぐ河内和泉を徇へ戰へば勝ち攻めば取る猛勢
宛ぐう破竹のおとく河泉の二州を攻下し渡部に
至る比おひ總勢かようそ二千餘騎隊伍を乱さぎ整
くゝと天王寺に陣を張り東に向ッく備へうう却説
北條氏ちさたつ頃天子を徙しまううせてうう天

下まで虞るる足るものなしと謂ひ驕り怠る油断大敵正成復さび起りしとの擲の歯を挽く警報よ内外大ひよ驚怖るし急ぎ軍備を整へて六波羅の二帥隅田通倫高橋宗康をして五千騎を将ゐて進撃るさしむ正成兵を分ちて四隊とし其三隊を伏兵とし而して弱兵一隊をとりて渡部橋を扼して陣を敵望見て易とり軽んト隊伍を乱して競ひ渡る隙て期したる我兵を間へうねたる狀をみて戦ひみづから逃走ると計策ありといふを

知る爭た追来る敵兵いと劇しく天王寺を過るをりしも左右よ茂る藪の中より齊しく起る三隊の伏兵一隊を敵の背後を遮ぎり二隊い左右の側面を撃ち佯り逃たる弱兵も爰ふ至りて盛りうへ四面よりして合撃みをふそ五千の賊軍鋏壁の中よ包まれ又詮術もなきものこうう一死力を出して漸やくみやく一方の血路を開き先を爭ひ逃走り渡部橋よ来りて見まび是いそも如何よいつの間よやらん橋さへ毀ち落されを進退爰み



楠氏屢々
襲ふの機を
示し給ふ
疑へり

谷まりて水に溺れて死する者無數なれども敢
へて擊取らるゝ逃るゝ者い稀なりける高時まをく
駿き恐るゝ坂東名代の勇將たる宇都宮公綱に命
じ紀清の兩黨五百騎を以て代り擊さしむ楠氏の
一族和田正遠正成に乞ふて曰くいへり我既に五千
の兵をもて擊勝たるに何ぞ五百の小兵に恐
るゝか手に噬して破らんに五百の兵を貸與せ
へ直ちに向ひ候らはんと事もなげなる宏言を
正成暫しと押こゞめ勝敗の機を離用に在り

決して兵の衆寡に拘ずぬ公綱素より勇名を負ひ寡
兵を以て敗後に向ひ挑て戰に心のうち死と誓ひ
しまと知る爲なり左まれば通倫等五千の兵に
りまて恐る爲に敵にして敢て侮るべきにあらず
を我假令うち勝とも多少兵士を傷みうん一矢を費
さゞ一卒を傷みを戰いまして敵を屈するその
術い吾方寸に在りと天王寺の陣營を引きひ兵
を收めて去れば公綱代りて天王寺に陣を既夜
四面を望て見るに野とまく山とまく洛驛にして然

連ねし炬火の光り延袤おようそ数里に渉り漸やく多く漸やく近し偖ちそ敵の寄せるるうゝめと公綱の軍相警しめ甲を釋きして待ちと三日三夜紀清の両黨鬼胎を抱き楠氏の兵日に増し加ると覚えたり迚もまの小勢にて當らんすべ思ひもよらぬ一下先引ぬぐる方然るべしとて公綱有理もと思ひ頓て六波羅に引帰りしうば正成の奇策爰に合期し復び天王寺を張り檄を出して兵を募り堅く鹵掠を禁しめ軍令整肅威儀嚴然ひゝ

きら士民撫育せしに遠近多く望こと寄せ来り属する者多く正成の威名京幾に振ふ天王寺の寶物に聖徳太子が撰ぜし未来記とゝるものなり如何なる事を記せしものやら古来より誰あつくまを見しもの在らざるを正成強て寺僧に請ひ将士と倶に讀むに曰く人皇九十五代に當り天下一下度乱まて主安こうばの時東魚来りて四海を呑む日西天に没まるあと三百七十日西鳥来りて東魚を食む海内一に帰する三年獼猴のど

きをの天下を掠むる三十余年大凶変ドもを一元より
帰せと以上漢文を以て記したり正成衆に向ひて
威儀を正し如何に諸君此に所謂る九十五代を
今上帝に奉ずや東魚を乃ち高時に西鳥
の食む所と為るを彼則ち族滅に帰せんのみ日
西天に没する三百七十日となる能察まべ帝の都
に還りたまへを蓋し明春に在らん欲以下云々の
文に至りて今より測り知りがたれど鬼神も
角ふも賊魁高時を誅戮し復たび天日を見んと

遠きに向ふべし諸君最とも勉めようしと掌を指き
卓論に誰か感嘆せざるもの奮励したり
ゝる現みや兵法に云へるなり敵を謀るものい必
ず先我を謀るとあるぞ正成が秘計にして味方の
英気を振起んと寺僧と謀りて文を作り聖徳太
子の未来記と号し偖そ斯い謀りしかりとぞ是
時に當りて皇子護良兵を起して吉野に拠り赤松
則村播磨に起りて王事に勤む是に於て京畿の
警聞交ぐ鎌倉に至る高時乃ち東北三道に檄

を傳へて大ひに兵を発し一子の時治族高直を
てまとに將たらしめ西正成等を擊つ正成金剛山の
地理を察し千窟に頓て一城を築き山を挾さて
壑を帶び城の周囲一里余高さ數百仞聳然として
雲を凌ぎ峨々たる山脈西南に聯なり要害堅固の
たらしを城中五ツの泉ありて旱魃なるとも涸る
ことなく槽を造りて糧を蓄へ以てその不虞
に備ふ乃ち別將として赤坂の城を守らしめ
而して正成自ら金剛山に徙る三年二月東兵三

道より進む三隊に分れて金剛山及び吉野赤坂城
を攻む赤坂の城兵よく拒ぎ屢々寄手を擊惱し
戰爭連りに打ち勝ちて衆寡敵せざるのみならず城
の水路を斷切られ城兵頓ぶる渴に迫り終に支へ
ること叶はず既に落去したりける吉野も囲まれ
受くること七日七夜呼吸を吐せず攻立られ勢ひ尽
く陷いるに及ぶ是に於て関東の三軍なる金剛山に
萃まり而して西南諸道の兵高時の徵に應ずる者
また来り會して總勢凡そ八十餘万官軍僅かに

千余人正成能く拒ぐが由なく左右なくも破られぬ
賊兵四面より一斉に仰ぎ攻む矢叫び太刀音鯨動の
声木魂は初めきく凄まじく天地も崩るゝかの至る
まで正成更に事ともせず士卒を指揮して城上に
り大木巨石を投げ掛け尋いで乱射したりしかば
あまた中りて死する者幾百人の数とぞ賊の
軍監高野高資十二人の執筆に命じて躬方の死傷
を記さしむるに三晝夜筆を閣ぬ又その殺多き知
るべし足るべしかくてぞ如何なる大軍ありとも力と

以て攻撃なさゞ勝んあと思ひもよらぬ持久の策
あるべきよりあと賊将時治等相議して諸軍に令して
戦ひを止め十重二十重に囲を居るのみ時しも頃
は二月の天よく霽て雨降らぬ久しく早しかるに
賊軍これに便りを得て火箭を櫓に射掛けて
焼立てんと攻撃を正成透さず機械を用ゐ射るに
應じて水を注ぎ常に焼あとなさいざしむ賊
将高直等相議して曰くかくる些小き山城に水
のかれ尽き謂まじ願ふに城兵夜に紛れ城外

より出て没むるべし前より赤坂と攻むるの日水路
絶ちて勝を得ん為の計策襲ぐべきなりと
名越某氏は兵三千を與へ千窟の城の東なる溪の
傍へは柵を構へ晝夜閑なく守れども前面も委し
く説くおとくそもあの城の要害なる啻に堅牢き
のみならず水さへ殊より湧出て旱魃に遭ふとも涸
るゝことなし徒らに如何に賊兵等の心を尽して
守るとて出て没むるものなるとて果い兵卒倦
み疲れ稍その守禦の怠たるを正成篤と見まもり

不意に夜撃をなすべしと寝耳に水の賊兵等駭
き周章て狼狽まどひ右往左往に敗走あるを追
散しつゝ官軍を造化精妙と凱歌を上げ敵の旗幟を
奪ふて還りその翌朝分捕りの名越の旗を城上
に高くさし上げ呼ばるやう寄手の陣へ物云さん
是そもそも昨夜名越公より我陣中へ贈らるゝ
見らるゝおとくあの幟に名越公の徽号なるを
我方にて無用の長物なり返却まゐらせんとて
思へども弓矢の手前只やすゝ返さゞ爰に来りて領

藁人形の
策八十余万
の寄手を
愚弄す

取たま人弓矢の上ゝて授受ゑさんと嘲弄されゝ名越の一隊憎き敵の宏言ゝる疾其口を劈き呉んと怒うと俱ゝ殺気を含ゝ無二無三ゝ押寄来り城ゝ薄りて挑ゝ戦ふ謀り設けし官軍い飽まで敵を怒らせゝ誘き寄ゝて豫てより櫓の檐ゝ釣たし大木巨石の釣縄を一時ゝ丁と断放てゝ霹靂一棗寄手の頭上へ瓦乱く礫と落かゝるとの木石ゝ中る者頭脳を砕くゝ四肢を折ゝ壓死まる者数を尽ゝ加之あらぬ城中ゝ之と弃一く射出ゝ矢い雨ゝり繁く飛来り矢尖ゝ掛りて死まるるの是彼合せゝ四千餘人鬼神を欺むく正成が稀代の智畧ゝ賊軍い舌を捲て鬼胎き恐ゝ慄ゝ敢て城ゝ薄らゝ四方を厳しくゝり囲ゝ睨まゝ合ゝ守り居るのゝ正成きゝも奇計を運らし藁人形数十体作り甲冑をうち被せゝ兵士の如く装粧せ夜城外ゝ整列せしめ屈竟の精兵五百騎ゝそゞ背後ゝ埋伏せしめ暁やゝ未明の霧いと深きを幸ひゝ動と鬨をゝ揚ゝるる偖い城中糧食尽きゝく勢ひ窮まり詮ゝ出戦ふと覚へ

しう此度を脱さぞ乗取とまよと尚懲ぞまみ賊の總軍喚き叫んで攻め蒐る我兵もまることを應ド能き程よ矢を発し迅速く城よ引揚げたりかくし程よ賊兵を大霧よ眼先を遮らよ敵を定うみ認め得ぞ距離間近く押来り瞳を定めくよく見きを筒をそも什麼よ是い如何よ敵と見えしい敵ろうでかの藁人形よて在りしうべ是よ至りて始めく悟り素破敵の計畧ろるぞ退やとらへ間もなうみくよ早あちかくろ大木巨石よ撃されて敢みく死をる

者五百餘人の多きみ至り八十餘万の大軍もたぐよの一城を拔く能ず荏苒経過うち二月も過ぐ三月も中旬過みぞろうよろる高時千窟の拔ざる伐聞き使者を遣いしく怠慢の罪を責め厳しく督促せし程よ諸將もかくて何時までう嗚呼くとし居らるぞと再び城攻めの準備を整へ這回そ工人よ命じて長さ二十丈計りの雲梯を造り壘を超えて彼方ろる城の壁よ架さしし六千の鋭兵ども縁りいく城よ入らんとるせし城正成士

卒に令を傳へ手ゝに炬火を投うけ〳〵傍らに
しく喞噛りて油を注ぎかくる程に見るく黒烟渦
まき上り炎々天を焦さこう賊兵前後度を失
ひ進むも退も幅狹き雲梯い遂に中央にう弗
然と燒折れ賊兵等壑に陷り燒死する者千を
以て數ふべし諸道の豪傑正成の威風を慕ひ官
軍に應ずる者多きが中に新田義貞ある者は
源氏の嫡流八幡太郎義家が末裔にして世々上
野の新田に居り州の豪族たり曩に父朝氏と共

に高時の催促に應じて寄手のうちに在りしが
ひそかに歸順の志ありその臣舟田義昌に語つ
て曰く吾苟くも源氏の苗裔にして時勢といひ言
ふべき臣下たる北條氏に驅役せらるゝのみなら
ず官軍に敵して逆名を負ふあと豈吾本意ならんや吾を吾國に歸り義兵を擧げて順に歸し
上を震襟を安んじ奉つり下家名を興さんと豫
てより思ひ決めれど勅命を奉ずるにはいまだ
事私にして人望をうんいまだ大塔宮の令旨を得

て事を挙んと欲まれど絶さその便りと得ぎ迫よ
聞く宮ゝ輓近高野に在まと汝とが為に使ひして
よく宮の令旨を乞来まとらく是より先大塔宮へ笠
置既に陷つるを危うく虎口を免るつ南都の般
若寺に匿まし賊兵迅くも探ひ知り寺の四方
を取囲み搜し求むるつと急あり宮ふも進退谷まり
く自殺ぬさんと傍へを見まべ大般若経の空函あ
まるを屈竟とその中に身を潜ませて匿るく間も
なく動也々々と入来る賊兵等彼方此方と寺の隅

々残る隈なく漁りゝグ遂に経函に目を注ぎ外面
の方に去りぬれば宮ふも二度の危急を逃れ従士九
人とのろ共に山伏の姿に身を窶し笈背ふく
南に走り吉野山に潜伏し復び兵を挙げゝうど
衆寡敵せぬ賊のくるに終に吉野も陷りて幾
干の苦患を嘗めつも高野山に匿まし居て山徒
を語らひく賊軍を刼やゝし或ひい彼グ糧食を
奪ひ出没自在変化常なく以く陰うふ楠氏を助
く義貞その蹤跡を知るとゝど所在を詳ふふ

せざるゆゑそ我探らせんとて義昌よかゝる密事を謀りしなり

通俗日本小史七編之上終

010190512954